續草庵集蒙求諺解　二　恋

續草庵和歌集蒙求諺解巻第三

梅月堂僧宣阿集編
梅仙堂平景新訂正

戀

初恋

いとかりやゆきたがうんあやしくも所どころ迷ひわるるかな
思ひいそもしらずやどをかりやどをかりはよしの山本のあやしく不
審なるこころ。そぞろ恋路に入るなり。最神よ。ふみもあらぬ
少人をうんとも思ひ恋路といふ。こころ。こたへ迷ひ
こころ。皆路の縁の初恋　なにそ人うらをきみうらをかも
けるこころみそぐよなしこをしへざるもうん（いせ大輔拾遺一）　いふ
こころみそぐ。なにそ扱ひ物こそ中れ。ふるは（有家後鑑千恋五）
いふ計恋の心路のこころけまでいとと入あるうんまでうん（六帖）

毫毛のあやまりにて、千里のそゝりとなるなり。つゝしみ
又十二因緣も、一念の心所より起るなり。同じつゝしみ
へきは此道也

茶伊与守貞世にて同しこゝろざを

今川氏也

彼て又神ふそ落る人もれ、ものもたれやおつとはみまとと音のゆゑ
勞（三条西家古雅上）初点ゆゑ人もちゝび。我心の内の滝をれば注
分しもたれきれ無ものなく。注もなく神と落る紙。り人
のもろまそゝびやばいろちんと也。杉くゝ又いゝ心とせくう。
せたるゝく。注もなく。又神と落る也。やうて、ゝのまる也。
又内の字かろくゝ多ゝ。人もれゝ。世間の人りもろ
ゝと雖神点ゝれば、かくゝもゝろさゝゆゝ杉ゝ人り

もろゝ也。果竟（はつきやう）ゝ人のもろゝこゝろまでもなく我心
ひろゝよもろゝゝ外れ縁といんゝそ人もれゝゝ也。
やうて。正命多震ゝ

悪点

かくばゝり何ゆゑゝ被ぞゝ若しもといでいゝこゝろん
悪点い。我ゝゝ人ゝを言いゝ。かくゝてゝ杉ゝ心也。神点の
内の事也。又神ゝ人ゝもろゝもゝ。はまゝなれ。い神
てはゝゝゝ人ゝまゝく。一向ゝいゝ出ゝ。塔悪ゝてゝ
へきゝゝゝ心也。又いゝ神くゝ。ゝ人のもろゝこゝん
特い。我ゝゝゝ人のゝもろゝゝ人のもろゝこゝん
ゝいゝもろゝ。所もろゝゝ。ゝ人ゝ。世
かくゝ心ゝゝ人ゝかくゝゝは点の通例ゝ。悪
点ゝ心ゝゝ。ゝゝ不及事也。さて方れ心いかくゝゝ

はこれをうらめしく思ひて他人のと
くいう物をもいひはぎこうはいとなきみわれふ君のと
はぐいう物をうらふべきやあるいはいとてみるふるる
まは外の事はくわうくやいうんもあるかしぱいは
そうそうさゆくうといいうんのうけしらば。
ようべきみうあるいつもいてあるこしぱ。物いうくさんと
へきまくそなうさゆくそうとついぐこしぱ。物いうくさんと
なう。君ともなく人こそあれうふ君しもとうた

彈正尹親王入首より同しうえを

渕い涙こうりうだよせよ涙河まはまいくせきをかれる
[illegible]川渕い涙こうかせかせ共とら紙てしいをしく
古点四　詞をうくうるたはうくあぐたぎたうるる我涙川の。
涙命より涙さうて渕とあうこれでいくくせたう祈ふか

まく渕も涙をうく紀事ハ同しまなうう。涙ふかくも
かくれよかし。涙ハ人のうみうあをと。何とぞはぎう
りもすぐ渕のうくくはくくはうるくくハうたもかく
ふへき事の世てさうも也。これい恋ふ也。涙を恋ふも。
恋ふ恋乃一ツ也。涙くうるて恋すると人めるかふ故
なり

寄河恋

紀れ多ふそ出る我神よせくい龍田れ河なう祈ふも。
紀涙世篇寄花述懐ふ。竜田乃川ふう祈共と
ハ。立田川い紅葉のなぐれて紅色なるゆ人ぞの立
田川なう祈ふも。我神よきく涙川い紅の文よか
ふくも。紅涙い至くはうく涙何い。紅葉よあわなり
ふうやうう神代もさうす立田川かく紅み水くぐか

人々 侍従 公方卿

袖を

涙をとゝめかねてふるとしたる中ふる涙をとゝめて

ひるは人目のつゝみしれば涙をもとゞめさゆうなし。

よるは人めもいまあれど。袖のうちさへやとゞめ兼ねを。

袖を結ぶ人と契りし中にこそ袖を結ぶこゝろ。

をとめ中に袖を結ぶ涙をもとゞめすぐさぬ人也又涙と我

よの中ぬ契りはをうれども。袖を結ぶいとゞもかなされ。

中れなうらくとなれ。中といふ人と我との間の事

をうれしと。中。袖のちくに浮ぶうちやうれども。人と契りぬ

中にも。袖を結ぶと云ふ心をいふんとて。たの中のうち成

かう用いて云ふ中のあよ又中のあり事也ぶく心と

結べとなり

藤原十全世卿 くゝ奇よみ侍りし 六条院 云

心法と風れ侍りくゝ中をれ侍れ人をいかなりうきう

心れ法と風乃吹き侍る。中のぶくゝ中とをいのうれ事也。

中の心法と。ちづみくゝ有ゆ心れ中とをいて人をれ心

乃風と。おりをいのうれ侍ををとをいてうゆ中れ侍くゝ云心

正家卿 忠恵 云

弾正尹親王 くゝ 手忠恵を

人めもくゝはゝむを同じ心をしてうきをもちこそ彩む中れ

中をゝ人の我ゝ中をれたくうれ事のうれどゝ人の紙志

のゝ心へ互ゝ同じ事をうれば中をゝと彩をて彩くれ

うきをもうくゝ互彩をを中をゝ人をうちをゝ心をゝ人を

我ゝの心乃同じ中をれうれ事をもあり也。さ彩ゝ

何をもゝ心ゝの心同じ中にあんゝ紙彩ゝ人也新古今

哀二俊成卿所よ引れ所をばよしなしとぶらいよいよ
そをぶに同じ所をとゝいんぴ合ふ歌くしぴか同じ心の所心
第夏所中よの詞ちゝ

等持院殿を大臣家こ首所よ　見哀

一あぶみせめくあてれ海ゐくで何中くれうゐ成ん
ちゝ人ぴ一春めくもぴ何とぞしてあいちゝいらんぐぴあ
事ハあゝぴあ一事のなくいぴみうゐもなくてこそよゐん
ゐ何ぐぴ中にもうれこんうゐんゐ也何中くいぴて
あゐうに中ゐにいてうきに何ぐぴ和てん也　みうゐこ
そあゐこゐ海いかうゐめ頃ちたかゐへもぐのうゐ風　伊勢大輔
涙こそあゐみの海とゐよゐれみうゐあゐて海ちせまゐ
相模同四　何中くに義ゐ・ぐみうゐいも有ゐまゐ何中くゐ
うけく成ん　小侍従同三　形ゐてこれいちげさのほゐ草なゐ

中くゐ白ゐん　寄象彩古哀　山せちゐく塔ゐいゐ公の方へも中ゆゐ也。
此集のせめくぴ大方此公ゐ中ぴ中ぴ和てれ公てんてく
もゐ

将軍家ゐく　立名哀

思ひ河哀ゐぐ波を伝ふくはこゐのゐ世ちゐがゐ
ちゐ川い思の深さ伝也。縁者名ゐも有ぐ所ゐぐ
思河ぐぐぐ流ちく水のゐいゐちゐ人ゐゐぐ清ちゐや
いとな哀一　ゐちぐ波いゐちぐしてちゐの立をいゐゐぐ波ゐ。ゐぐちく
ちゐていゐゐ　引ちもゐぐどいひさいぐ引くゐちぐ波ゐゐや
しゐ何ゐ神ゐ沾ちん　北雅二　引ふきく宮師の浦れゐぐ
沾いゐゐぐゐ神のゐまてこゐてちれ　一宮紀伊金哀下　引こゐちれ
潮ゐいさいぐ山ゐ清きやれこゐてゐ波いゐて　素性古哀三
形ゐいのゐちこれ人いゐゐてゐちゐの立いゐれ事

なりぬさんとかぐらぬ。うれとゐをうんぬ。ようくいいようそぬ。ぬ
ゐはゐこのぬあをのあるゑもうれゐぬ。思川とゐりたよ
ゐをそぬ。をゐとようぬあぐは虚乃後也。今い をたぐして虚
ゐ落ちれぐも。他波といをたりの後ゐてぬゐよは實
ゐ をゑのあるせうれゐも

同じ こ ゐ こ 首 ゑ ま 不 を ゑ

ゐぐもかくうきゐんをゐと ゑをうて ゐい 後 よ 世 を ぬ ゐ ゐ ん
なぐもかくいぬんそかくのちくも。もい 脚字也 なそも
かくをぐかうゐよ 御よ ん 水 ゐ ゐ ぬ ど 契 し 物 式 作物
いくせもあぐは乃をぐもかくあまのかるれ れ ん
ゐぐるく 後人ゐ 古雅 ゐうま 失 ま ゐ ぬ ゐ れ な ぐ も か く 流 の
川よ 浮 ぬ ゐ ん 後人ゐ 古ゑ一 な ん ぐ ぬ か く の ぐ く ぐ れ 人 を ゑ 和
てをを幸もちく。我身い世をゑす幸ぐも。世ゑつゐと

ゐ ぬ 一 時 式 ゑ す ゐ と い ゐ ゐ て。ゑ ゐ ま 年 月 を い ゐ ゐ ゐ
ぬ ゐ 幸 も 世 ゐ ぬ 乃 ぬ い。世 ゐ 後 ゐ ゐ ゐ 乃 ゐ と ぬ く ゐ ゐ。
ゑ ま ゐ ゐ 後 も。身 を ぬ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ。彩繪 神 身 乃 後 也。
力 を ゐ ゐ と ゐ ゐ ゐ 同 じ 人 を ゐ も の ゐ ゐ ゐ 脚字也。
人 ゐ ま ぐ も。

旁本ゑと

ぬ ゐ て も ぬ い ゐ て ゐ ぬ ま い ゐ れ ゐ ゐ ぬ れ 神 板 ゐ ゐ み ゐ 称 ぐ
ま ぐ れ の ゐ れ ぐ も。板 乃 ぬ ぬ れ ゐ く。ゐ ゐ ま ゐ ぬ ぐ く。わ が
板 ゐ 人 も。ゐ ゐ く ゑ を ぬ く せ ぐ も。ま ま れ く て。我 方 ゐ ゐ
じ く ゐ も ゐ れ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ。ぬ ゐ ゐ。我 身 ゐ ぬ。
人 を 板 ゐ ゐ て ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ。ゐ ゐ 和 尚 の ゐ ゐ 月 ゐ ぬ ぬ 雲
を ぬ ゐ ゐ ゐ く ま ゐ 者 ゐ ゐ 月 ゐ ぬ ぐ も 彩古 ゑ一 引
合 ゐ ゐ ぬ い ぬ ゐ の ゐ い 古 き ゐ ゐ 物 初 也 い い 詞 の 脚字也。

そのうへはむかしとはいひながらこれをほめけり。
又大和國より石上の内より布留といふ所のあれいでそのこと
ばをとりていつさて枕詞とつかはしていふ

實白殿續百首より　別点

ふるもまたいとはいとどふるかとはかなくてとしのくれ
別点に忘れの心なりてかなくてはいたくせ間屋の心なりて。
則ちて我心をとかくふる内の事をてされの人へ
は忘れの心をばまたまた内の事をば内の後也。それ心より我心より忘
れたる人をばまたまたといふ事をまたまたとべ〻枕
どもは先たばといふべきなり。めよいと出るなりそ
まよ行て今までよりてあるべきなり。梅んごろはせしべく
やかるべきなれば。事のあるまとけるといてやはべきと。
らくはまたいてあるべきなり。

やうてはづかしかりけれとてきいるくいらるる。
てはなりけれとも　流りていあるべきあるべき深川のなかば
くらいなりとてとてはなれ　別点六　別点六　松けてくるとそんれ
竹の一よれかふちりもとてとれ　枝春　枝春　みても
帰るん紅葉ていかんかふも数もとてとれ　枝秋　もぞ
まるといても同じてはのの行方也。伊勢物語よりいと
でけくとかるも同じ格也　別点　別点　ふるとそんれば紅ねるべ
らくはまるとる事れよりもどすする　事用紅葉　紅葉　これるの影也
不定意
やうてはづかしかりけれとてもどれいるとて迷て意得ぬも
意路とは。一見とも入かるとて迷てへ物をれがとして
もかくしてとも。迷てへ也。それば意得ぬ物をれば意得ぬ
ようべくれ。かくへ返さん事はかなるべき行くべ。何とぞ也。

れしうくて、ゑにかゝるこゝろもとゝまりて、
こゝろのもとをたゞくいたゞくやうにて、何ゝとして也、西行法師
ゑゝ妻し、伊勢物語の、我身ひとつはもとの身にあらぬ
秋にはあらけれども月はかはらぬ合こゝろ
ゑゝうをそなたにと花歌にいたるまでも
我ゑにはかはるもたゞそなたをのみ思ひこゝろ
ぞ（羽柴吉兵衛）
こゝろえあらんとおもふれば、もとのいつまでもこゝろにて、年とゝもに
どゝ、ばかりとそ、ひゝむべき事にもあらず、我が今いのゝ
ゝうこゝろ、ゝ、ばかりとそ、ひゝむべき事にもあらず、我が今いのゝ
歌をとゝめ、ゝ、ばかりとそ、ひゝむべき事にもあらず、我が今いのゝ
和歌所命ゝ同じくんを
命にくゝ、ゝ、ばかりとそ、ひゝむべき事

ゑを神に祈ゝ、ふ、ゝれ人にはかくて、ゝ、ばかりの叶ゝ
まゝ、ゝ、ゝ命とおもゝ、ゝ、ゝ、

民部卿二條宰相なと所よみけるよ

寄浦恋

あまとをとこのおきとぺいふねまでとこいとをしとなけとかはこ海ん

あまとをとこのおきとぺいふねまでとこいとをしとなけとかはこ海ん

とをとこのぺいふねまでとこいとをしとなけとかはこ海ん

思ふこころをしるしるとをもぺ色事をしれなくに一向よそいとふ

まとをとこのぺいふねまでとこいとをしとなけとかはこ海ん

ぢぺま

ぐつの内も草まれ世中にあんかりい 彩古 養和元年

秀ゑ出と

北軍家にて　行思

はしたもの人をいかでそ先の世に　契ること身はうきなれども

我しらぬうらいそ人の思いあはしき事也されども人の

無住云

よしのゝ山にこもりゐて侍りしに、世をのがれ、人をまれにこそ見侍りしか、我せこがくべき宵なりさゝがにの蜘のふるまひかねてしるしるしなり（衣通姫古墨滅）西京雜記云。蜘蛛下有喜事。

此事絶世遠

ゝ出ぬ。軒の蜘蛛のすがくもの糸のたえ、ずして、我せこがくべき宵なりさゝがにの蜘のふるまひかねてしるしなり。蜘蛛下有喜事。

此事のたゞしき。我もまた、世をのがれ、人をまれにこそ見侍りしか、ふるまひかねてしるしなり。蜘蛛下有喜事。

此事絶世遠ゝ出ぬ。軒の蜘蛛のすがくもの糸のたえ、ずして、我せこがくべき宵なりさゝがにの蜘のふるまひかねてしるしなり。

無住云

世をのがれ、人をまれにこそ見侍りしか、ふるまひかねてしるしなり。

此事絶世遠ゝ出ぬ。軒の蜘蛛のすがくもの糸のたえ、ずして、我せこがくべき宵なりさゝがにの蜘のふるまひかねてしるしなり。

世をのがれ、人をまれにこそ見侍りしか、ふるまひかねてしるしなり。

無住云

仮名をかゝむ、ことはりそなへられきん、書れ何まことの後

仮名をかゝむ、ことはりそなへられきん、書れ何まことの後

仮名をかゝむ、ことはりそなへられきん、書れ何まことの後

仮名をかゝむ、ことはりそなへられきん、書れ何まことの後

と形みゝ、ゆきとゝくとられきん事ならば、万一よ、くる事ならば、

事ゝ、ゆきとゝくとられきん事ならば、万一よ、くる事ならば、

ひとりやきんし、ゆきとゝくハ、何事ぞ、仮名を形しりもとゝくとられきん

事也。新ゆき拾遺、ゆきとゝくハ、下賤の者、仮名を形しりもとゝくとられきん

ゝとゝくとられきん、ゆきとゝくハ、なにまことゝくとられきん。ひ、所文字

ゝうちゞいとゝくとられきん、ゆきとゝくハ、

これ是てかくの奇也。撰集の年漸りて。高く見ふれ
ずして。迂てさ示へちゝびゝ人ても覚として。
後すも有へき也　梨花の白をちくやらぬさに
よりてこれの物　春色之方後古春下　風の吹しめつれの色くれなゐ
ちらぬさにより学ひ物　奥風彩拾雅上　是と二字はちらぬまでなり。
つゆの事上古より中り事也。後集第二花あも心影有
詩人玉屑七云。晴合子美王元之。李学白樂天詩在南
州掌賦春日雑興云。雨株桃杏映羅斜裝點高
州副使家。何事春風容不得和鶯吹折数枝花。其
子喜祐云。老杜掌有恰似春風相欺得。夜来吹折
数枝花之句語頗似。因請易之元之忙然曰。吾
詩精詣。逐能晴合子美。更為詩曰李與樂天為
後進敢欺杜甫是前身。千不復易　蔡貫天詩話　引合之

今ちらぬさにこれを習れつゝ人しらぬ物そ
なく行とゝあまつ子らくいつゝあるかしいなり物也。
りとやらしくゝ所ゝ
あれどもいつゝ行まつ也とゝらすてくい
引のあけくゝあをはくさん人まうく也ゝれ別点の情なり
くれなゐ　義經法師物語之文　をうり出をうり物
給た之后ゝ
ゝ所までまうくゝとゝいくゝ
人のゆ所。ふくくもゝ
夜也くくもいくゝ
有までまうくゝ。我い早くゝ
まうくゝとゝ雪れゆ
ちくゝ也ちくゝ

思いつるとかれてきふくの月を待ちれずとも　藤原定家卿 後拾遺 巻四

　　　

ぬく思て人いろ〳〵ふみもとゝのいろ〳〵紙。今ゝ面をさくさくろふ
なてこゝろなどのうたの中也と思ふ也。かくあるよ分て思く
ばゝ面よさくさくてそれば。ほゝてちげさく人月ゝ法ぎと。
うゝ〳〵いてゝる事ゝ一向有まゝき事也。さろれど我も
みゝとりゝ思ふく。人ものゝいとなど紙べ。彩しまゝゝる也。
と思ふ也。されも忘ゝ情て侍ゝ心ゝ也。
彩とゝて也

待宣云

如何よもゝ月をかゝて侍よゝの法ゆくそうゝ面ゝ
見ゝ（ケヤ）れとゝりいづる月まゝと人よいゝて考をゝそまて
（八丸若忘二）人を待く。外ゝ月あゆゝ心べさと思ゝゆく月を待る
とゝてゝかゝつけて待ゝさくゝそゝる。ゆゝく考ゝ拵
ゝ面さくゝゝりゝれどゝ月を待ゝ也ゝれどゝさて

いゝすべゝさ宣ゝく考ゝも明ゝべゝ也とゝなゝく也

契ゝ也云

さゝてゝい契ゝさ社夢まゝ彩ゝ彩ゝの人ゝゆゝ中ゝれ
契ゝまゝふゝそゝゝどゝしゝれゝゝゝ紙ゝゝゝ彩ゝの心
ゝゝ人ゝゝ彩ゝ面ゝ考ゝ彩ゝて。考ゝてゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ人のゝゝいゝ契ゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
の彩ゝゝゝゝて人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
人ゝゝゝ

民ゝに家ゝて　彩ゝ也云

ゝ来ゝて彩ゝれゝゝ人ゝの心ゝゝゝゝ彩ゝの考ゝゝ
彩ゝて考ゝ事ゝゝて。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
非。彩ゝ彩ゝ彩ゝゝ合ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
事ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ彩ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

そもそもこれ一旦の事にはあれども約束までは一つ有べきゆゑんもつまれば事なるべし。神のもとにて祈まれども人のなすまれまれなり

彈正少弼祈を家にて所望しける

別歌

契をも人のこころにおもはねば面影計何とまがふ春

別よのぞみてかれて一つ色なんとの繋りをば殘さるよ。人の面影計いなどおもひて明はまるまで人は心にあはゆへ契をのこさんに我はまことに心深さゆへ面影の別よとまつる計にて祈よ。うしなれば事おもく。ゆゑ人何とまるらんと激しといつるなり

饒成寺孝雅の家にて祈のこころを

鳥れ者と祈のうかむ言なかばとへ

これをばとりたと祈のうたと。鳥の音の。別を催とはうきふそのちすの事。祈くうかんと也。一年の事にてはいまだ祈にて別也。鳥れ者はいまざうるべきふ。ゆゑて祈にてゆゑいつくうれ也。是は別の心也。祈の別の心也。茶の後は祈にてゆゑ別の心也。祈の詞別なるべはりはいつくれ心。一年の也。もの何は二度の用にてくばりはいまざる心にて。二度にはつくれ心也。てよりかれよくらしと。心を分ばにてはいに一首の心のふくに意を歌なり。

よくく熟讀翫味をべし。

元亨院入道大納言家おくく　曉の恋

ちる衣をけのうるをゆるゆゑにはあるなるもつれ

二人にて結びしひもを一人にて逢みるまでは解とり　そ

杉人（伊勢物）人を思ふ心は下紐をこそ二人のゆにとりて別るれば
はこそ二人して又結ぶ也心ものも下紐をとりて紐をとくなり
しに明るとて別るゆへこそ二人して結ぶ也ゆへに有鳥の音
る別を催をゆへ別をゆへをゆへをゆへ鳥ゆへ別をとる
はきき也明るは明る也

古集五言詩百そよ　別て後書郎詩

心古集未考別る後又逢人事のいとうめてしも也
ふまるいにしへ別れ人まどに又いつうらて物しうれしさ
人まゆへりとあ間也　引ることあくとめ別れ物をとりて也
いとうの人まにうとひあん（業平春上）今夜ゆくゆくして人まゆ
をとるふ今之別なば今ねくと人ゆへ今夜行の人
まわりて逢ことをゆくゆくれを也とあづう
の人まどにいとばゆ今夜行をもゆるくと逢事はあづ

しゆ今夜なるのうづうなるうの人まさくと入いたるうすべさ宮ん
てなれとそかすべとゆゆうしも也第本の考ふ。うつせみ探る始ま
ふまるく別れ行人とれの詞ゆ若いとうふれたるのぞあ
らん事もいつあさしゆけくていいでぬとまもかなん
事のゆとうりなれを杉ぶとたいもゆいとど有後
乃公引合とあくし（例）かと
つなと杉人ふ表ふ（西行玉神）

業室上人来く奇ふまれは　契恋

うつしどとつとそいくたのまれ孫ぶあとともとあんう
紅葉かとどとつもそのまれどいうといて。吉貴（しんじん）
ふ思とぶあうたのそかとどなどいとどもゆうのちざ
また涙乃足ゆぶとふ名を行て又うんぶめくれ杉人
ふとふとふいるれぶかいつしどといふとゆうくふのまれ

節也ぞくいとりくも也

和軍家三首之

契をくはれ月りとよりやたぐあつで別りスぞうのん

はよ者ん月見紙契りをくもあくはあ〜ぢよくいあれ

どこぞ行もちのて彩べき事にもはりどこ細に

人夜の別れうれをサ人ば宇れくあくんもス人夜

りやうに別のうりべさあ〜とと云ふくようやくでとう。

よりやい俗語ぞよりしてをけそとうふてをけかぐく

いつて同じ。平家春月より妻し

和あ歌

家衣

うはりかのあくとうはり衣返てこつる夢の契よ

いくさうくさ者きはいうぐ出の衣りを返てぞある

小町古今二 衣をうくしてぬきとへば忘れ人よ者ん紙も

衣を返て行くれば。和くよ人よ者ん。契紙かくばか

ゆく夢れさあそし。誠くよ者ん出て月行りう

香り殘りて有ものくさつて。移香の袖ぬまぐさそい濡

ぬ者ーぬ人ぬ人ぬ夢やく者ん和て也ーまも

遇不逢恋

雜波人ゆりたく恋れ一ようぐにあらといさのくもとこぐ也じ

一夜者ぞて又あつど。一夜也ーもあつどんさ年ーうれく。

ちいくーうくぐれいちぐ。ぞりーあよ。一夜あい者。

又ものあるゆ。ぞりもいぬこぐ新く也。れりうく者ーは。火

れりうくぐ。こぐうくいうん人ちう也。新りくい折くぞよる

くも。思いつるれりうく紫り夕烟ひもぐうれ一高れ

ぐうるる。左上天皇 右古良 一ようん。ぞ戸の節をもくスい縁り烟也

雜波にのあれるもねり一夜少人弁とたくてや高りう

（寄 [illegible] 面十 [illegible]）川合又[illegible]

雪霜 [illegible]

清 [illegible]ぐ伝ひ押まむ秋風の吹あり[illegible]れ[illegible]
清れい清まる事なる詞也我身いきえよ。清ること
何ゝ行まん。押しむ事いたれも。細い人ゝ。紙風の
吹てはの身い。行くかひなきゆへ也。[illegible]の雪れご
[illegible]きえまま也。秋風[illegible]飽をそなていてゝ。[illegible]身
とそへていてゝ。心をくゝ。正[illegible]蓑を出てゝ

降る[illegible]大紙を[illegible]して　稀 [illegible]

かこ[illegible]ぶと我身を浦れあさ[illegible]紙[illegible]
つゝ身を浦こんゝ。ゝこと恨んの心也　[illegible]ある貴紙
身をうゝとをこねぐゝ。[illegible]れなぐあまれあこゆくゝ
作物　下句い稀ちる事をゝ。まぐ紙こいてゝ　[illegible]

[illegible]ゝ衣れ[illegible]紙あ[illegible]みまぐをたあれや老ぐきゝ侍さ
勢　後人宋[illegible]　なるとゆくいこゝ世をれだやすまのあされ侍
古[illegible]五
やき衣まぐ紙なゝん　著作徽[illegible]　かこゝい恨也人れまれしよ未
[illegible]ゝ。かこゝうゝみいやは[illegible]ゝ紙作くあゝぐこゝ也。子
細い人れゝ人れ計にぐゝいあゝぐ。ゝ。我方にをこゝゝれ有
ゝゆゝよ。人の身ゝ事風。まぐゝたゝ成ゝるなゝぐゝ。ゝこゝて
ゆゝ也。是ゝ[illegible]れ云ゝ[illegible]ゝて。ゝゝ紙ゝゝゝる。[illegible]人の
怨ゝ道ゝ[illegible]ゝ。子夏ゝ[illegible]ゝ為ゝ人ゝ謀而不忠やの
ゝあゝ。生を考れ[illegible]れゝ[illegible]ゝ紙ゝ結ゝ。ゝれ
ゝて。ゝゝ紙ゝゝふゝゝあれ。詞ゝい合ゝゝ

雪木 [illegible]

ゝ紙ゝゝゝをゝれ一[illegible]ゝれをげきゝなぐゝいゝある
ゝゝゝ身のゝげゝいゝぐゝいゝある。ゝゝゝぐゝまゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

こゝろ人のこゝろに心のうつるとぞ
てぞてゝほゝき事なるとぞ
ぜ。心ゝ如そゝとつゝ也。ゝゝが方も人も我も也

小野社法樂しゝて人のよませけゝ

家書云

きのぶゝゝあつまれゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ

上詠歌

雁鳥歌

きゝてゆくこゑは奥より時鳥はつかなだゆめ音信をとれ

時鳥の音をもゆめとなれ行くこゑのふるさとを人いとゝとん

一方歌 一鳥不鳴山更幽 王安石

山のゐりてふるさとあるこゑ。

鳥もなくぞ時こそもまれなる時也世をよい稀よ鳴し。

音信をきくたきゝつゝ偽くいつゝ。何ゝそ

しゝとゝ山ゝ里あくゝてゝ。第方よ一度衰信乃宵

てはいぶくく音信乃ちれと鳴ゝて。変くれ音信と

そゝりまゝ。何ゝゝ。ゝ度ゝまれと音信

のゝれゝゝ也。信信の方ゝてもきゝる

た情ゝ信入道家ふく

遇不逢歌

お坂れ実ゝゝゝゝ坂ゝをゝいれゝ乃去ゝ生ゝれ

貌ゝゝ山ゝゝゝ生ゝ信ゝ逢坂の関乃ゝゝゝた身ゝ山ゝ

ゝれ 一方歌 一聞逢ゝゝゝゝ。ゝゝゝ成ゝゝゝゝ。ゝゝゝ後

ゝゝ。ゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝ。ゝゝゝ

ゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

熱田にて人々参詣のやうすをきゝ、そもそもぐんの方ゆくべきやうなり

たゞつ入るこそ1　契忠

うらうらもとゝいふに我方（ゆイ）せあく契の末とぞなりて

心ぞ。南方（なんぱう）契ら公。又契くはのんも申へ。契てね

ゝとそ入のめしてゝいて。法体法体とうけて堅く誓（ちかひ）給

ーてかくるかうつじと。まうけく契ーまるれいよりや

人とかいてゞゆくしい人いかくるも。我方こそ。契のまと

そうしうふんつ孫して。物しい給まゞきとそつゝせあく

は親切ーゝ。又南方行まをうけて。契うゆかゝていて。

必ういうら申ゝる。ゆくしいうゆくへかくるゝ。ぬう分ー

ゝ。今ー契ー伺のまをいつまでも。ゆうゆおーて。行ゝしい

そうえまゝと契ゝゝ。契の末を待ーゝくらいゝあと。ゆゝ

つゞ。契ーゝ。ゝ。ゝ。

き年をつくへ人のうつり来いこれて。都て絶
ざりし昔の立ゆて。孫ん子ごろよりて来をわるん出て。
次第ん立くゆ也れいよく也

氏子の家にて　拾弐

もりけさいのんとうつまづや立て陳て月にうこ立こうん
根幸ん人のこれかうかして次第にこれて絶しちうる
かうさて始立しゆくこうそ。名しこさ来ちうた其方へ
名も名だして。今立ちて絶こうふ。この立氏井人ば茅
方こ立しゆ。ちうけどついしんまでもかりうゆん。
う拂ゆ人ゆもこうけしてうこ名り立物ちうんこ也い
いしこ立こ有紙。ちうい無ゆて絶こうのこうはけど、
いいしゆまでもかうこうて人ゆもこうゆくそこちう也

絶久立

ふこうて雪ゆそ乃ん渉茅立侍とせしよ人ゆ立さも
絶て久しく成しうこう。立い渉茅系こゆ立しも拂い
立ゆど。さけども山渉茅をふこうて立こうけ年に
乃こく絶しこ立さも立ちうゆこうれ。ちうけ庵しこ拂
こいきて立長く絶し侍を人こゆ也。茅生寒こう。
いこく明ふまた渉こうを乃れこうこうちゆけさ
茅生のこうとゆこいて井いのうふこう常陸乃立へ
陳氏は久しくこう結いざうこ間こ。毒猪花いこう
かうこゆ絶こ絶乃。宿乃立拂かくゆ立こうさけ
陳氏のこう結しゆく。井にしの立永く。絶絶こ立は
乃こうこう桐乃立こ物こうけこゆこうこうわうず
人を絶こうけこゆ結こうけこゆこうこうわうず
あこうこう絶こうこ立拂ゆ集の立こ絶こうれいこうれこ

引ばうたん

筆おろしの大臣家にて　絶句を

それぞれの通りにおもひよりて後にそれぞれ
にそれぞれの詞にかなひたる。なつかしきこの系れか
よりかなていにの人のたしきにいろはにきく
ぐうれんだ。一向に。詞の通りに筆もしえよりわらは
はしきにおもしきに使ひまかなどにもどそれの詞い。
姑の詞にかなてくらあちぐ。その系詞いかにいしが。
人のいこのくれ使ひくに使ひしりそのの系の通りに問ひた。
つきに人の仮名にもどきしに人にいそしもきうあ
詞に使ひそうたうたに筆ものも

恋恨　元

愛ぐだにてもさりて恨づやいつを人にかしまとを移ば

いつを人にかれいまして。なてに恨ん来もきわれば夢ようか
ともんてて恨うしたもんてて。それい人ぐ夢ようんてて。なに何
恨んもどあうくはんにもあうくても。但俗のもあうくあるはゆゆ

和歌所にて撰歌初の日　元亨元年

撰歌所は撰集なるめ俗也又建仁撰歌合なと有。

何にても歌をしい出ようく来也

恋のうたとかそうしもうきうい人葉ふんげんさいうりうも
恋ふしふうさちげふちぐ仕ど思入ほさいうざう
ちけふうのさいうほかうとあれいばよしくとまま
ほとは有まで。我方へ人れ公のうく思入さんきう秋をだ。
さうるゆをもとうるぐさみ。畢意人のそういれ法さゆん。
恋りかりといつてゆは人をとそんいのいうく恋う也。

四ゝとゝいふゝむゝかゝとゝはゝたゝのゝちゝげゝきゝこゝら
ゝんゝちゝも也

菊実白船ふく　恨忘

秋ゝよゝりゝはゝまゝこゝの菊ゝづゝゝゝゝ敷ゝをゝいゝづゝゝゝんゝ
ゝゝゝゝ

うたてもいかなるうんぷうなれやさてこそいはせんとぞ思ふ公いかがもをぼの後備よりこのされはいかでくるしからん